NO.29　　ガット　　1979.7.1発行

ガット

東村山市民テニスクラブ協議会機関紙

発行責任者　柳　利夫
住所　東村山市萩山町5-6-26-301
Tel.　0423-92-8808
編集者　川村英明

'79年春季市民大会に参加して

男子ダブルスA　（恩多クラブ）　宮崎　峰雄

これ迄の市民大会に於いてコンビを組んで以来3回目か4回目になるであろうか？　気心の程はお互いに知り尽しているのでコンビネーションの方は心配はなかったが、何故か一抹の不安が残るのはどうした事であろうか？　考えてみれば簡単な事でこの不安は私自身の練習不足の怠慢さから起こっている事ではなかったろうか？　試合の数週間前の或る日曜の午後、市民グランドで行なわれているはずの指導者練習会に少し遅れて行ってみると、当の山本さんも出席していた。思い切って〝今度も一緒に組んで貰えるでしょうか？〟と丁重にプロポーズをした所、〝こちらこそどうぞよろしく〟と快く受けていただいて無事縁組も決まりこれ迄の不安は一掃される思いがした。

コンビを組んでの練習は試合迄この時一回限りだったと思う。しかし調子さえ良ければ、そしてまかり間違えば準決勝？などと悪い夢をみていたものだが組合せの結果は、神も仏もないのであろうか？　ドローの上では3回戦目に我が愛する同志の広川・山口組、その先は又又同好会中ナンバーワン・音に聞こえた武谷・永井組であった。これで膨らみかけていた夢は早くも幾分かはしぼんでしまった。兎も角頑張って準々決勝迄出て武谷組とどこ迄やれるかやってみようと語り合いながら新たなファイトを掻き立てて試合に挑んだ。

1回戦はなく2回戦は1回戦不戦勝で上がって来た北山クラブの奥山・黒須組との対戦だった。試合前の打合いから判断して勿論負ける相手ではない。奥山氏の確実でしかも重いファーストサーブとトップスピンのフォアハンドのストロークには予断を許さぬ物があったが、黒須氏に欠陥がある事は判然としていた。試合馴れしていない為と硬くなっていた為か、彼の打つボールは全てがいわゆるビビッテいる死んだボールであり、7対2と試合は早くも一方的に流れた。〝あと1ゲームだ！気楽に思う様にやりましょう〟と言ったのが間違いの元だった。私は私なりに、山本さんは山本さんなりに、二人共各々が華麗なスタンドプレーでこの試合に一刻も早くケリをつけたかった。

ところが、連帯の鎖を解いたダブルスなどもはやダブルスではなかった。ミスの連発が始まりまず1ゲームは惜しげもなく相手チームに与えてしまった。まだ7対3だ、もう少し位は遊べるだろう、1ゲームさえ取ればと言う気持が頭の中を支配し同じパターンの連続となってしまった。更に1ゲームを与えた、まだ7対4ではないか、と性懲りもなく同じパターンをくり返しているうちに一時は完全に諦めていた思わぬ伏兵、北山クラブの応援団が活気をとり戻し、次第に沸き始めていた。やる事なす事全て凡ミスとなりゲームは更に7対5、7対6と切迫して来た時には今迄死んだボールばかり打っていた北山クラブの黒須氏のラケットから送り出されて来るボールは不思議な事に生き物の様に我々のコート上に飛び掛って来た。北山クラブの応援席は沸きに沸いて我々に対する声援は全く掻き消されてしまった。最悪の事態だ、あと1ゲーム落としたら7対7だ、万一そうなったら恐らくこの流れを食い止める力が今の我々にあるだろうか？　歩み寄って〝もうこれ以上は絶対やれない、ここで決着をつけましょう〟と言った時の私の顔は恐らく多少青ざめていたに違いない。結果は8対6で我々の辛勝に終わったが、今考えてもどの様にして最後のゲームを取ったか思い出す事が出来ない。恐らく地味に継ぎまくったプレーに終始した結果相手のミスで勝を拾ったのではないだろうか。いずれにしても気持のよい勝利でなかった事は山本さんにしても同じではなかったろうか。

この試合に於いて教えられた事は沢山ある、そして、それらは一つ一つがこれからの私のテニスにとって大きなプラスとなるであろう。以下列記してみると、まず第1に、試合前の練習だけで相手の力量を遮断せずただひたすら自分の力だけを信じて確実なプレーをする事。第2に、イージー（安易な）ボールに対しイージーな構えでボールを処理すれば必ずイージー・ミスにつながる事。第3、いかに華麗なプレーでも得点は1点しかない、故に一球、一球を大切に扱い、この一球に地味な芸術品を創るが如く精魂をこめてボールを打たなければならない。第4、ダブルスは二人が一つになって行なうゲームであるから勝手なプレーは許されない、お互いの呼吸が聞える程に終始連帯の絆をピーンと張りつめていなければコンビネーション・プレーは不可能である事。最後に、試合はすべからく遊びではない、それは勝負であり場合によっては生死を賭けた勝負になる事もあり得る、それならばイージーさ（遊び）は許されるはずがない。イージー・ボールは十中八、九、確実に決めなければ必ず無残な敗北につながる。

技術的には絶対負けるはずのない、勿論体面上も絶対負けられない人にかつて一度みじめな敗北を喫した事があった。言い訳は色々あったが終わった以上それはもはや何の役にも立たない。敗北のスコアーはお互いの間の過去の事実として歴然として記録されてしまった。私は同じ職場の毎日顔を合わせなければならないその人と顔を見るのも話をするのも非常に苦痛だった事を憶えている。その期間はリターン・マッチで勝つ迄約半年位だったろうか。全てはイージーさが為せるわざであった。

男子ダブルスA級3回戦は我が愛しているはずの同志、否！強力な敵、広川・山口組であった。許されよ！　何処からともなく両氏の奥方の鋭い視線があるだろう事を感じながら、その時我々のペアーは言うともなく無言の中に強力な連帯の絆がよみがえっていたのでした。北山クラブとの試合で一本も入らなかった私のファースト・サーブが不思議によく入り、更に、山本さんのバッグンのボーチが光っていた。

（裏面左下に参加者の声が続きます）

私とテニス
〈連載20〉

美住クラブ　河野宏子

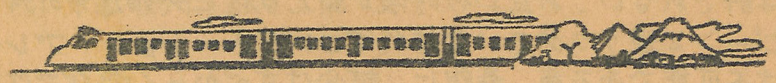
学生時代スポーツとは全く縁のなかった私です。学校を卒業し、会社の新入生になった時から、自分で好むと好まざるとに関係なく各種のスポーツの、各課支店対抗と云うものに出場させられ、バレー、バスケット、ソフトボール、卓球、etc..ルールも知らない私は、夢中で参加しました。

そのスポーツ大会の行なわれるグランドには、テニスコートも6面ありました。バスケットで顔をまっ赤にして、フーフー云っている隣りで、テニスボールの〝ポーン、ポーン〟と云う音、見てみるとバスケットと違い、なんと優雅にボールを追っていることだろう、と思いました。『この優雅なスポーツの方が、バスケットやバレーより、エレガンスな私には向いているのではないか、もしかして』と思いました。

初めてラケットを持ち、ボールを打った時、自分ながら吃驚しました。なんと不細工な恰好になるんだろうと—。それからは、同じ職場の仲間達と、コートを借り合って練習しましたが、コーチして下さる方がいなかったもので、今でもそうですが自己流で、ボールがラケットに当りさえすれば良い、と云うところでした。少しも上達しないうちに勤めを辞めてしまいました。

結婚し、子供が産まれ、等で十年近くテニスから離れていました。市民テニスクラブに入れていただき、久し振りに持ったラケット、胸がドキドキしました。でも打ってみて、相変らず不恰好なテニスでした。

今も、少しでも上手に、少しでも優雅に打てる様になりたいと願っているのですが、とにかく出席日数が少なくて、すこしも上達しません。これからも、皆様の邪魔になりながらコートをウロウロしますので、よろしくお願いします。



男子ダブルスB.　（本町クラブ）　樋口善一

テニスを始めて早くも1年と3ヵ月過ぎましたが、技術の方は一向に上達せず運動神経の悪さにがっかりしています。たまに調子が良い時があり気を良くしていると、又、一生懸命やっているのに当りが悪いといった様なくりかえしです。

去年の公式戦の時は、始めたばかりでしたので出ませんでしたが、今年は出たいと思いながらも都合がつかずあきらめていたところ、間際になってひまが出来、パートナーがいない所へ申し込みましたら、役員の方が米山さんと組んで下さいました。米山さんは、私よりも後から入会された方でしたがテニス歴は長く、なんだか気が引けましたが、頑張りましょうと云われてベストを尽そうと気をとり直しました。試合当日、コートへ行ってみますと中学生の自分の息子の様な選手が大勢いるので、負けたらいやだなと思いましたが、幸い（?!）上手な人と当たりましたのであきらめがつきました。

練習試合をよくやっているせいかあまり上りもせずのびのびとやれましたが、技術の不足で自分ばかりミスをして米山さんには悪い事をしました。来年までには、技術を磨き勝利をめざして頑張りたいと思っております。

女子ダブルス・優勝　（東住クラブ）　山口信子

今回の市民大会参加者は、いままでになく多くにぎわいました。優勝できたことはうれしいことでしたが、決勝の2セットめ、6－1でおさえられるところ6－4までズルズルといったこと、大いに反省しています。ストロークに不安のあるまま試合にのぞみ、自分なりに納得のできる試合が出来なかったのが残念でした。いつもパートナー（武谷さん）は私がミスをやってもやっても、はげましながらひっぱってくれます。

三十の手習いで始めたテニス、そろそろ6年になるのかな～、そんなにながいことやっているのに、最初に言われてることが今だにできないのです。最近は、楽しみのはずなのに少々いやになっています。第一目標にストローク（バックスイングを早くする、手首を使わないこと、ボールから目を離さない、前足に体重をのせること等々）を少しでもよくするように練習したいと思っています。

試合の後はいつも〝う～ん！もう少し上手になりたい〟としきりに思うのです。時がたつと、そんなにあせることもないと落ちついて、そのうち又、又、のんびりと楽しむ方に逃げるのです。色の黒さに負けないようがんばらなくては。皆さんよろしく御指導下さい、見捨てないで！

壮年ダブルス　勝つことは愉快なこと　（東住クラブ）　鈴木靖男

ことしの大会は、とても楽しかったです。身の程を知って、壮年にエントリーしたのがよかった。なにしろこれまでは、トシも考えずに、一般の部に参加しては、汗を流す間もなく負けるばかり。いいかげん、1回戦ボーイの境遇にもいや気をさすというものです。それが今回は、組合せが良かったのか、対戦相手に恵まれた（失礼？）と云うべきか、1・2戦なんとか勝ち進むことが出来たし、試合の内容は恥ずかしながらも、ゲームの数では他の人たちよりも多くやらせていただく結果になって、300円の参加費どころか、これまでのものも取り戻した感じで大いに満足しています。それにしても、三位決定戦には負けたのに、三位の立派な賞状とカップを受けたのですが、このままもらっちゃっていいんでしょうか。

私たちの対戦相手は、同じ市民テのいわば身内同士の対戦だったので、気分的には非常にラクになれたのですが、一方では、余り気楽になり過ぎて、集中力やファイトが稀薄になってはいけない、と私としては適度の緊張感を保つことに心掛けたつもりです。しかしなにぶんにも、技倆も経験も浅い私たちでしたから、二つ勝つのが精いっぱいだったのでしょう。

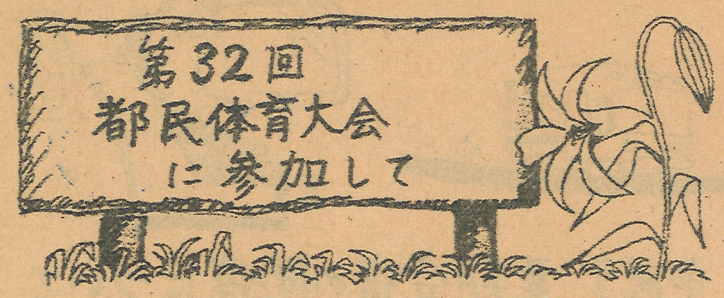
反省することも多くありますが、何はともあれ、《勝つことは愉快なことと見付けたり》。来年はもっと勝って、もっともっと愉快でありたいと思っています。

追記（川村英明）

印象その1、壮年組ではペアの一方が60才をこえ、かつペア合計年令110才以上（60+50, 65+45, etc.）との対戦は（15－0）から始める方式を採用しては如何かと思います。

印象その2、三位決定戦の市川・村井両氏のいかにも壮年らしい無理のないプレイと共にマナーの素晴しさ・人柄が強く心に残っています。わが市民テの阿辺川・浦川・筑紫さんに学んで、美しく年令をとりたいものだと思いました。

日時の都合で〝自然法則〟に素直に従い、素敵なパートナーに恵まれて春の一日を存分に楽しませていただきました。皆さん、本当にありがとうございました。



東村山市（男子）準優勝　武谷　直也

去る5月31日、6月1日の二日間、第32回都民体育大会庭球競技会が、男子25区市、女子23区市の参加を得て、男子は桜台テニスクラブ、女子は田園テニスクラブで、熱戦がくりひろげられました。昨年に比してやゝ参加チームが少なかったのは、エントリーしておきながら監督会議に出席しなかった若干の区市があったこと（例えば昨年優勝の日野市）がひびいているように思われます。また、最低2人選手がいればエントリーできる仕組みになっているため、各区市の連盟としてはエントリーしたかったのでしょうが、ウィークデーの試合ということも参加しにくい要因であったようにも思われます。

さて、試合を振り返って経過、感想を記しておきます。わが男子チームは、原田・武谷の2人が、女子チームは、渡辺・坪谷・武谷の3人が試合に出場しました。女子は1回戦に優勝の呼び名の高い文京区に当たり、健闘むなしく3－0で敗れてしまいました（文京区は決勝進出を果しております）。くじ運も勝負の一つだとすれば、これもいたしかたのないところかもしれません。

他方、男子チームは、1回戦千代田区に（3－0）で勝ち、2回戦強敵の立川市とぶつかり、ダブルスを取った後、NO.2の武谷が敗れはしたものの、NO.1の原田が一方的に勝ち思いもよらず3回戦に駒を進めることができました。3回戦は、伏兵国立市と勝負することになったのですが、この時既に6時近くになっており、私たちがダブルスを取ったところで、シングルスの試合開始時刻が試合の途中日没にかかりそうな時間でありましたので、いそぎ試合を始めましたが、案の定、原田が（3－6）、武谷が（3－5）でリードを許したところで7時になり、ボールが見えにくくなってしまいました。そこで、本部に意見を求めましたところ、両市で話し合ってほしいということでしたので、私たちは明日この続きをしてほしいと提案しましたところ、国立市は翌日は選手が参加できない情況だから、このまま続けてほしいとの要望がありました。しかし、実際ボールが見えない情況での試合は不可能であることから、結局、国立市がシングルス棄権という扱いになりました。

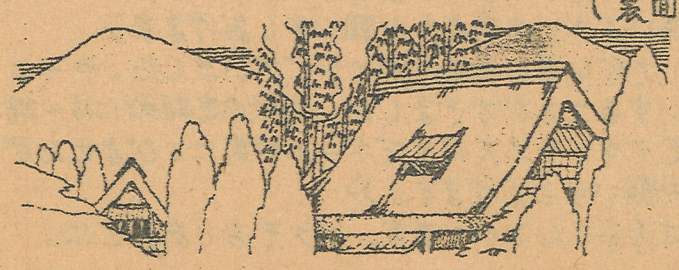
翌6月1日、優勝候補の一角に名をつらねている小平市と準決勝を行なうことになりました。武谷が（4－8）で古川に敗れた後、ダブルスを（8－6）で勝ち、決戦はNO.1の勝負にかかりました。原田に対する宮川のこの試合程、手に汗を握る好試合も今回少なかったのではないかと思います。前半（4－2）とリードを許した原田が、中盤盛り返し（6－4）とリードし、このまま逃げ切れるかに思ったのですが、宮川のふんばりにジリジリと挽回され（7－6）のスコアーまできました。第14ゲーム、原田はマッチポイントを2回取ったにも拘わらず安全を計ったことが裏目に出て、逆にこのゲームを落し、（7－7）のジュースにもつれ込んでしまいました。しかし、その後、必死にねばる宮川を突きはなし、2ゲーム連取し（9－7）のスコアーで第3幕を閉じ、わがチームの決勝進出という快挙を成し遂げることができました。

小平戦が始まったのが10時20分、終わったのが1時10分、エントリー選手5人全員手ぐすねを引いて待っていた優勝候補の世田谷区と20分置いての決勝戦ということで、あわてて昼めしをかき込み試合にのぞんだのですが、ダブルスを（2－6，3－6）で落としたところで、私たち2人共昨日からの連戦で体力の限界にきているとの判断で残りシングルス2試合を棄権することにしました。決勝戦として誠にふがいない有様でしたが、止むを得なかったと思います。

以上の経過の中から皆さんに参考にして頂ければと思うことに触れておきましょう。

まず、ダブルスの戦術についてです。私たちがとにもかくにもここまでこれたのは、ダブルス1組シングルス2人の3ポイントの勝負というこのような大会で、ダブルスを取って先行してきたことが非常に大きかったように思われます。原田と私は昨年秋の市民大会や春の市民大会などで対戦していたとはいえペアーを組むのは初めてでした。彼は非常に守備が固い（よく拾い、よくねばり、コートカバーリングが広い）上に、ボレー、スマッシュが安定しているなど幾つかの印象を持っていましたが、実際に組んでみて、ねばる＝相手ミスを誘う、チャンスと見れば攻撃に転じ決める、このコンビネーションが巧みなのに感心しました。強弱とりまぜての前後のゆさぶり（足下へのボールのプレースメントとロブの使い方）は特に有効でした。これらの持味を生かす戦術として、私たちがレシーブ側のとき、第1サーブでは、私たち2人共ベースラインに位置する守備陣型を必ず採るなど良い例かとも思います。これは第1サーブに続いてサーバーがネットにつめることを予想した上で、レシーバーはレシーブ後ネットにつめれないがあえてつめない場合に、有効な陣型といえるでしょう。なぜならビッグゲームやそれに倣って私たちもよく採るレシーブ側の陣型として、レシーバーのパートナーがサービスライン近辺に位置する陣型のとき、サーブが良くレシーブがあまくなると、サーバーのパートナーであるネットマンにそのレシーブボールをポーチされ、それが一般にレシーバーのパートナーの足下にプレースメントされるため、一発で決められることが多いのですが、上記の陣型ですと2人共ベースラインにいるため、よっぽどのあまいレシーブでない限り、一発のポーチ又はボレーで決まることはないということです。それどころか、サーバーの第1ボレーが短かかったり、力のない浮き気味のボールの場合、逆にレシーブ側の2人が攻撃に転じることもできますし、上手なロブでサーバー側を後退させ、逆にレシーバー側がネットを取ることも可能です。今回の試合でも、この陣型で多くのポイントをかせぐことができました。唯この陣型を有効にするための条件として、グランドストロークが安定し特にプレースメントが良いこと、ロブができることがあげられる

（裏面へつづく）

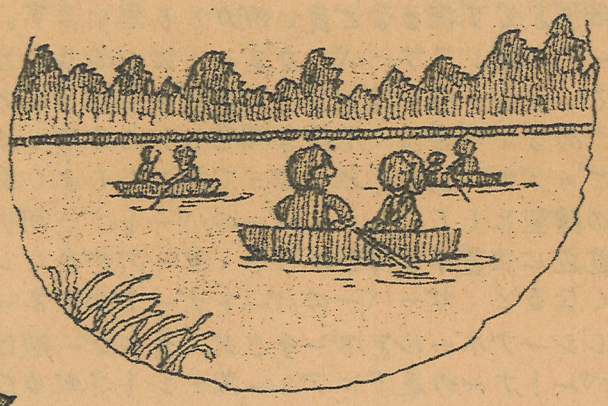


（その3右下より）

でしょう。私たちの定期練習でもよくやる2対2や2対1（ボレーとグランドストローク）のときを想い起していただければ、このことが直ちに理解できるのではないでしょうか。

次に基礎体力、特にスタミナがいかに大切かということについて触れます。第1日目は12時半から7時の間に、ほとんど休む間もなく、私たち2人はダブルス3回、シングルス3回の計6試合をこなさざるを得ない日程でしたので、私など、第1日目2回戦の立川市とのシングル戦の第1ゲームで右脚がつりかかり、それをかばいながら試合をしたため、動きがにぶく、初め4ゲームも先行される有様でした。3回戦の国立市との薄暮試合でももうクタクタの上に目もかすんで（一寸大げさですが）良く見えなくなるなどさんたんたるものでした。原田も私より8才も若いとはいえ2日目の準決勝の長い試合の後は昨日の疲れと重なってぐったりとしていました。その結果が決勝戦のザマとなって現われてしまったわけです。日常の健康管理、体力づくりに私たちももっと気をつけようではありませんか。

国立市との一件、準決勝戦で遅刻したことによって相手小平市に大変迷惑をかけたことや、決勝でシングルスを戦えなかったことなど、反省すべき点も幾つかありましたが、2人とも本当によく頑張ったものだというのが偽らざる心境です。最後になりますが、2日間を通じ、体育課の田口さんや柳さんが応援にかけつけてくれたことや第1日目敗れて心身共疲れの残っている中、田園コートから桜台コートに馳せ参じてくれた渡辺、坪谷、武谷の女子選手の応援が私たちを勇気付けてくれました。この場を借りて感謝の意を表わしたいと思います。（尚、文中敬称は略させて頂きました。）



柏崎市の野村信一さん

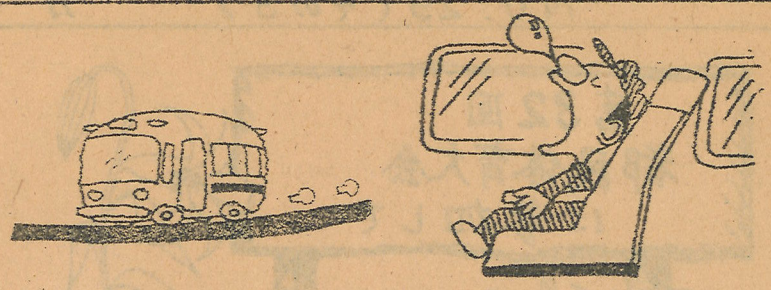
おめでとうございます

お馴みの柏崎ローンテニス協会の事務局長・野村信一さんからつぎのお便りが柳宛にありましたのでご紹介します（野村さんご容赦下さい）。

〈一足先に南の海で泳いできましたが、皆様にはお元気でお過ごしのことと存じます。私ども、この度今井哲夫様ご夫妻のご媒妁により、5月26日に京都にて結婚式をあげ‥‥（中略）。今までお世話になりました暖かさを大切に二人で歩みたく思います。今後ともよきアドバイザーとしてお付き合い下さいますようお願い申しあげます〉

追伸として《いろいろありがとうございました。やっとゴールインすることができました。今秋の定期戦には一緒に行く予定です。テニスはまだボールが前にとびませんがよろしくお願い申し上げます。》

奥さまは秀子さんといいます。どうぞおしあわせに。



市民テ 夏期合宿の開催について

── 那須グリーンウッドテニスランチで実施 ──

東村山市民テニスクラブ協議会の夏の定例行事となっています夏期合宿、今年もその具体的な計画がまとまりました。テニスコートには既に6月9日(土)より概要の掲示をして、参加者の募集を始めましたが、ガットの誌上を借りてこの企画をご紹介いたします。

〈 実 施 要 領 〉

日時　7月27日(金)、28日(土)、29日(日)の3日間

場所　那須グリーンウッドテニスランチ
　　栃木県那須郡那須町大字芦野字築場

内容　詳細な合宿計画、内容等は実行委員を決めて検討いたしますが、大略次の通りです。
(1) テニスロッジに宿泊（冷房付）
(2) コート4面（ハードコート）を使用
(3) 各種大会、技術の16㎜映画会を計画
(4) キャンプファイア、花火大会等を計画
(5) その他楽しい企画をいっぱい、

参加人数　大人40人、子供15人程度を定員とします。
（当初30人を定員としましたが、希望者が殺到しましたので40人に増員いたします）

費用　概算ですが次の通り
大人男性　18,000円程度
〃女性　15,000円程度
子供(小学生)　12,000円程度

申込先　予約金 5,000円 を添えて、協議会事務局笹野井までお申込み下さい。

消　息

★ 東住クラブの筑紫孝さん（70才）は、さる5月28日軽度の脳血栓を起こし、翌29日久米川病院に入院、現在加療中です。順調にいけば7月中旬頃退院予定。お大事に。

★ 恩多クラブの上釜さんの長男・博君（小1）はさる4月14日夕方交通事故にあい、久米川病院に入院治療中でしたが（本紙27号既報）、その後都合により順天堂病院へ転院し現在治療中。まだ何回かの手術を要しますが経過は順調の様子。予定では秋頃退院できるかも‥‥とのこと。

★ 美住クラブの八木洋子さんは「右足第2趾軟骨腫」の手術のため、さる4月9日入院しましたが4月21日無事退院しました。7月からはコートに出たいと語っていました。

★ 昨年の8月末にナイター練習中、脚首を骨折し久米川病院へ入院、その後通院治療中であった恩多クラブの青山秀雄さん（本紙24号既報）は、その後の回復経過は順調で7月から復帰することになりました。

：編集：宮村テニス・スクールのアンケート結果を武谷さん
：後記：がまとめて下さいました。別刷でお届けします。